

# こしえるびと

つむぐストーリー vol.100

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。  
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の  
メッセージをシリーズで紹介していく。

## 農業の指導者から生産者へ

まだまだ寒い日が続く中、一足早く春の陽気に包まれたハウス内。滝澤幸夫さんは赤く色付いたイチゴを慣れた手つきで一つ一つ収穫する。

非農家に生まれ育った幸夫さん。縁のなかつた農業を学び、専門知識を生かして農業指導や農業振興に携わった。指導していくうちに「自分でも農業をやってみよう」と思うようになり、生産者としての道を選んだ。就農の地として選んだのは、30代の頃農業改良普及員として赴任したことのある花泉町。仕事を通してできた仲間があり、県境にも近く宮城県の情報もキャッチできることにも引かれた。花泉町老松に住居とハウスを建て、幸夫さんのイチゴ栽培が始まった。

## 収量を上げるため試行錯誤

イチゴは、野菜の中でも設備や栽培管理に多くの費用や手間がかかり、技術力の差が出やすいとされる。それでも、手をかけただけ収量が上がり、難しさがあるからこそやりがい大きい。「収量を上げ、売り上げが増えて初めて農業は面白いと思える」と幸夫さん。「農業は二人一組で行う作業が多い」と、作業のほとんどは幸夫さんと妻の旬子さんの2人でこなす。初めは思うように収量が上がらず、毎年少しずつやり方を変えて試行錯誤を重ねた。イチゴの特性が分かってきた今は、収量が主産地の上位クラスと同じぐらいになった。「あと一歩、トップクラスの生産者と肩を並べられるようになりたい」と意気込んでいる。

## 失敗を共有し前進したい

幸夫さんが部会長を務めるJAいちご生産部会が目指すのは、少しでも収益を上げること。そのために幸夫さんが部会長就任と同時に始めたのが、部会員が失敗談を共有する「しくじり勉強会」。何で失敗したのか、どの過程、どの考え方が間違っていたのかを部会員同士で話し合う。「生産者は、成功したことは話すが、失敗したことは話したくない。チャレンジして失敗したことの中に、前進につながるヒントがあるはず」とピンチをチャンスにつながる効果を期待している。

「毎年、新しいチャレンジをしていくことが楽しい」と話す幸夫さん。失敗と経験を糧に、産地の発展を目指して歩み続ける。

技術力を磨いて収量を上げていきたい

花泉町老松 滝澤 幸夫さん



## PROFILE

滝澤 幸夫さん (62)

Yukio Takisawa

花泉町老松

1960年盛岡市生まれ。岩手大学大学院を修了後岩手県庁に入庁。農業改良普及員として農業振興に携わり、2002年退職。花泉町に移住して就農し、20年JAいちご生産部会長に就任。野菜ソムリエプロ。イチゴ11畝、野菜2畝。妻と2人暮らし。

